琉球大学学術リポジトリ

仲宗根政善「浄魂を抱いて」の内容構成と、補助教材による授業構成の試み

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2018-08-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大胡, 太郎, Ohogo, Tarou メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42247

仲宗根政善「浄魂を抱いて」の内容構成と、補助教材による授業構成の試み

A Study of contents of Nakasone Seizen “Himeyuri no Tou wo Meguru Hitobito no Syuki” as educational materials,and a study of constraction of class education by using some sub-texts

大胡 太郎

はじめに

仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』（初版では『沖縄の悲劇　姫百合の塔をめぐる人々の手記』（華頂出版、一九五一年、二七四頁－以下、初版『姫百合の手記』）は、戦後の沖縄の文学作品を使用して、国語という教科が国語そのものとしても、教科横断的に行われるべき平和教育においても寄与できる重要な教材としての価値を広く認められていることは言うまでもない。初版終章として置かれた「浄魂を抱いて」と題された章は、高校生用の国語副読本『高校生のための副読本　沖縄の文学〈近代・現代編〉』（一九九〇年－以下『沖縄の文学〈近代・現代編〉』）の冒頭に置かれており、また「浄魂を抱いて」は、この副読本刊行以前から、沖縄の高校生に向けて多くの教師たちによって数々の教育現場での教育実践がある。

一方で、授業において教材として扱うためには、前提となる沖縄戦と戦後を項目として書き出してみても、以下のように膨大な歴史的現実と事項を抱えている。

そもそもの学徒動員、南部への撤退と壕への避難、壕からの日本兵による追い出しや「死の解散命令」、そして散り散りになったままのアダンの茂みなどへの避難、そしてそれぞれの追い詰められた場での投降や集団自決、さらに戦後の民間人捕虜としての生活の開始状況と、占領下での民政府設置と住民生活の再開など、加えてこれらのどの段階でも死がつきまとい、そしてなによりも、戦後、仲宗根政善が学徒たちの死を、まさにかき抱くようにして生きたことなど、前提となる様々なことがらをふまえての読み・学びの場づくりが必要であるだろう。

しかし、これらのことがらは、本教材を単元として構成する場合、その授業の導入として教師による口頭の説明だけではおそらく充分でないであろうと考えられるが、これらを学ばせるのが主眼の歴史教育ではない。そのため、生徒達がいわば「ある程度のことは既に知っている」ことを前提とせざるをえないのではないだろうか。

本稿では、「浄魂を抱いて」を教材として授業展開するために、仲宗根政善の遺した様々な文章や作品の中から、補助教材とできることがらの最小限を、「浄魂を抱いて」の内容展開に即しながら示し、それによって来るべき授業実践に寄与したい。

一　本文の問題点

まず、『沖縄の文学〈近代・現代編〉』一九九〇年発行の初版「浄魂を抱いて」に見出される誤植について指摘しておきたい。十三頁1～3行目からは次のようにある。

……手を首筋にやると、頸動脈（けいどうみゃく）すれすれに傷を負っていた。この傷あとに手をふれながら、わずか十二センチ

の間にかかる命の緒を思い、運命のふしぎを考えるのであった。……（傍線稿者）

これは初版『姫百合の手記』に「わずか半センチの間」とあり、二版『実録ああひめゆりの学徒』（文研出版、一九六八年、三四五頁）、三版『沖縄の悲劇ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』（東邦書店、一九七四年、四三一頁）、『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』（角川書店、一九八〇年、三四三頁）まで「半センチ」とあるが、その二年後の一九八二年に文庫版化された『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』（角川文庫、三四三頁　以下、初期文庫版『ひめゆりの手記』）で「十二センチ」となっており、この本文を高校生用副読本『沖縄の文学』が使用したためであろう。最終版とも呼ぶべき角川文庫の改訂初版（一九九〇年、以下、改訂文庫版『ひめゆりの手記』において「半センチ」と再び改められるまでこの本文で出版され続けたが、明らかな誤植である。

前稿[1]にも触れたが、この「わずか半センチの間」という表現は、戦場を生きのびた人々が、兵士と民間人とを問わず、その不条理な死と生とを分けた「数センチの差」「数十センチの差」「数メートルの差」としてしばしば語られるものと類似した間隔であり、感覚である。多くは、死した人とその時死ななかった自己とを分ける距離を指すが、仲宗根政善のように、自己の身体のどこに傷を受けたかが生死を分けたことを示すものとして表現されることもあり、重要な表現である。

二　仲宗根政善の他作品・言説

ここで仲宗根政善の他の著作について概観し、さらにそれらの解説や諸論考にも少しく触れたい。前節で、初版『ひめゆり手記』から現在の角川文庫版『ひめゆり手記』（角川ソフィア文庫）に至るまでの書名、出版社、出版年については概観したので、その他のものについて触れておく。

仲宗根政善著となるものに歌集『蚊帳のホタル』（一九八八年）、『石に刻む』（一九八三年）、随想『琉球語の美しさ』（一九九五年）が、まず挙げられる。また、戦後の仲宗根の日記を抜粋した『ひめゆりと生きて』が刊行されている。仲宗根の没後、追悼文集『追悼・仲宗根政善』に関係者や教え子などの追悼文が集められており、ひめゆり平和祈念資料館の企画展『浄魂を抱いた生涯』のブックレットなども、仲宗根の言葉や行動、教えなどが回顧されており、それらを知ることができる。これらの『手記』および諸書にある仲宗根の言動や思念、思想を詳細に読み解いた解説と論考として、仲程昌徳『「ひめゆり」たちの声―『手記』と『日記』を読み解く』（二〇一二年）がある。

また、そもそも「ひめゆり学徒隊と沖縄戦」についての、ひめゆり学徒隊生存者による大規模な証言や手記をもととした『手記』に匹敵する入門書として『ひめゆり平和祈念資料館公式ガイドブック』（一九八九年初版、九六年改訂版）および全面改訂版『公式ガイドブック』（二〇〇四年初版）などがある。また、仲宗根政善『ひめゆり手記』や『公式ガイドブック』が多くの人々の手記や証言を掲載しているのに対して、「個人手記」と通称されている、ひめゆり学徒生存者個人が出版した『手記』が刊行されているが、ここでは省略に従う。

三「浄魂を抱いて」の内容構成

題名の「浄魂を抱いて」は、沖縄戦に九死に一生を得た仲宗根が自らに課した、いわば戦後の生き方を表したものである。仲程昌徳は『「ひめゆり」たちの声』の「あとがき」にて（二一七ページ）で、以下のように評している。

『手記』の最終章「三八浄魂を抱いて」は、仲宗根政善の思いがほとばしり出た一章となっている。そこに

は、随所に親子の情とともに生死についての深い思念が纏められていた。

戦争が終わって、幾万の屍が風雨にさらされていること、生徒たちは、収容されたあと、孤児院や病院で働くようになったこと、浄魂と書かれた白木の箱が届けられたこと、わが子の最期を知る手がかりになるものを求めて多くの父母が尋ねてきたこと、戦後はじめての生徒の結婚式に呼ばれたこと、戦後生まれた男の子を失ったこと、三年後、父親が亡くなった娘のことを訪ねて来たこと、五、六年たっても幾十人もの親が、わが子の最期の地を探し求めている、といったことを記して行く中で、仲宗根は、生徒たちが、岩壁にピンで刻んだ最期の文字も、今では、誰にも知られず苔むしてしまっているに違いないが、「第六感」のようなもので、「母の霊台に伝わってくれたら」と考えることもあると書いていた。それは仲宗根の体験に根ざしていた。

この仲程による内容事項の列挙にも伺われるように「浄魂を抱いて」の章は、事実と思念と思索とが、「軸」となる事柄とそれに纏わりつくように想起される沖縄戦の戦場での体験や思念と戦後のことがらが、時系列ではないかたちで書き記され「ほとばしり出」ている。そしてこのことは、仲宗根の思念と思考とが、決して単線的に構築されたものではないことを示してもいよう。

さらに、この「想起→沖縄戦への連想」的な叙述構成は、仲宗根の書きものの一大特徴でもあって、仲程は「何を見ても、何を聞いても、いつ何どきでも思い出されるのは戦争のあの日あの時のことということになれば、特別だとしかいいようがない」(『ひめゆりと生きて』三二四ページ、後に仲程『「ひめゆり」たちの声』第2章に収録)とあるとおりであり、この「想起→沖縄戦への連想」は仲宗根の生き方にかかわる。このことは、仲宗根の言語観にも結びついており、次節に補助教材として紹介する言語・今帰仁方言についてのエッセイにも端的に見られるも

のである。

『沖縄の文学』所収の「浄魂を抱いて」に従って内容の場面分けを試みつつ、その各部分の、いわば「軸」となる段落のエピソードやキーワードと、それにまつわり連鎖的に想起される内容との複合的な記述を確認してゆく。なお、形式段落については、本書がいわゆる教科書式の書式なので、会話、心中思惟、引用、短歌（前後に空白半行あり）は全て改行しているが、内容的には同一段落内であるので、別段落とはしなかったので、カウントのし方には別のとらえ方もあり得る。

頁	行～	場面	形式段落	内容
8頁	L.3~	1	1	八月二十二日第三外科壕 最後の脱出者
	L.5~		2	六月二十三日沖縄戦終了生存者の収容幾万の屍
	L.8~	2	3	一九四六年一月金城和信遺骨・遺品収集娘の死地判明
9頁	L.9~	3	4	仲宗根政善石川収容所
	L.11~		5	諮詢会事務所に遺骨が届けられる
	L.13~		6	白木の箱に「**浄魂**」ささげ持ち帰宅遺族の最初の来訪
10頁	L.1~		7	遺骨・黒髪遺族への分骨仲宗根の苦しみ
	L.11~		8	この遺族をひめゆりの塔へ案内
	L.15~		9	ひめゆりの塔壕内で人声の噂聞きに行く遺族暗然とする仲宗根
12頁	L.1~		10	浄魂を枕辺に安置悪夢生きる力の回復★
	L.10~	4	11	愛児と就寝戦場壕内の記憶のフラッシュバック
	L.12~		12	戦場壕内の記憶のフラッシュバック眠れず
	L.17~		13	**六月十九日生徒解散の夜仲宗根瀕死の負傷捕虜**
13頁	L,5~		14	仲宗根の生の実感愛児への愛情
	L.10~		15	愛児から感じる幸福感亡き乙女らの愛情生命の奇跡の実感
	L.14~	5	16	**沖縄戦における生死を分けたものへの思索①★**
14頁	L.5~		17	**沖縄戦における生死を分けたものへの思索②★**
	L.11~		18	**沖縄戦における生死を分けたものへの思索②★**
	L.15~		19	戦後はじめての生徒の結婚式生の実感

15 頁	L.7~		20	戦後の男児誕生と二日後の死
	L.12~		21	男児の死から亡き乙女へ一九四八年ひめゆりの塔納骨堂完成浄魂がひめゆりの塔へ戻る
	L.16	6	22	久米島から遺族来訪
	L.17~		23	仲宗根遺族に最期の様子の説明
16 頁	L.4~		24	戦後三年遺族・親の子への思い
	L.10~		25	戦後五年遺族の来訪遺骨移動命令
17 頁	L.5~		26	遺骨移動命令遺族の失望
	L.10~		27	十度めの捜索で娘の遺骨を探し当てた遺族全国幾万の母親の思いへ
	l.16~	7	28	生徒たち岩壁にピンで刻んだ**最期の言葉**磯虫が**母の霊台へ伝える**ことの想像★
18 頁	L.4~		29	仲宗根の母の死**蚊帳のホタル夕日のタブー第六感と生徒の最期の言葉が母の心眼への映る**ことの想像★
	L.15~		30	「悲しさの」歌
19 頁	L.1~		31	「信子よ貞子よいとし子よ」歌金城夫妻
	L.8~	8	32	戦後五年那覇郊外遺骨**沖縄戦の体験の記憶と平和への希求★**
	L.2~		33	**人類への沖縄戦の記憶の継承と平和への希求★**

（注）★は、仲宗根の生死観、戦争観、平和観を知るうえで特に重要な段落
ゴシックで示したのは、「軸」をなすエピソードやキーワードを含む部分

四　補助教材化としての『琉球語の美しさ』『日記』

仲宗根は、膨大な量の手書き原稿やメモ、そして『日記』を遺している。それらのうち、言語（琉球語・今帰仁方言など）や文学（主に『おもろさうし』やおもろ語）、ひめゆり学徒や沖縄戦に関する多くは琉球大学付属図書館仲宗根政善文庫に収められている。また、『日記』はひめゆり平和祈念資料館に寄贈された。

仲宗根の書きものの特徴として『ひめゆり手記』に限らず全体において、仲程が指摘する重大な点がある。前節に引いた仲程による「解説」で、仲宗根の、ひめゆりに結びつけられた部分を、『日記』の中にある「記」と呼び、さらにその特徴について、

「記」は、何にもまして「ひめゆり」のことが思い出されたり、思い浮かんだりした時に書き記されたといっていいだろうが、しかしそれは戦闘全体に及んでいるわけではない。

とし、その「限られた『記』」として8つを挙げている。

一九五三年五月から一九八七年四月まで、およそ三十五年にわたって書き続けられた「記」の中に見られる戦場の回想が、南風原陸軍病院に向かった日、陸軍病院を撤退した日、六月十九日の解散を宣言した日、二十三日の捕虜になった日、そして収容所を抜け出して宜野座病院に渡嘉敷良子を見舞った日といったような、ほぼ右に見られる十指にも満たない出来事に集中しているというのは、これまた異様といっていいだろう。実際仲宗根は、それだけを繰り返し書いているといっていいほどなのである。（三二四～五ページ）

この８つのうち、「浄魂を抱いて」に載るのは13段落に「六月十九日の解散を宣言した日」から「二十三日の捕虜になった日」のことが一段落に収められた部分である。この指摘に鑑みれば、当該箇所の重要さは言うまでもない。

13　二十年**六月十九日、生徒解散の夜**、午前四時、伊原の道路上で至近弾をくらってぶったおれ、人事不省になった。意識を回復してから、照屋兄に助けられて、立ちあがると、ぬらぬらと血が流れていた。手を首筋にやると、頸動脈（けいどうみゃく）すれすれに傷をおっていた。この傷あとに手をふれながら、わずか数センチの間にかかる命の緒を思い、運命のふしぎを考えるのであった。死の瞬間、まぶたに浮かんだのはこの子のおもかげであり、心の底に残っていたのは“子”という一念であった。（『沖縄の文学』十二～三ページ。ただしゴシック体への変更は稿者、傍線部も私に改めた。以下同様）

ここに、「浄魂を抱いて」の中では、5に連なる、生死を分けたもの、「命の緒」「運命のふしぎ」への思考が始発する。さらに仲宗根は独自の死生観を、この5において語るのだが、この部分については旧稿にふれたのでここではくりかえさない。ここにさらに、仲宗根の以下のような思索を繋いでみることはどうだろうか。

死に直面して生命の深さをのぞき、生命の尊さを知った。生命は極めてもろい。しかしまた、生命は極めて強靭であり、容易に消えるものではない。永劫の過去からつづいて来ている生命の神秘におどろく。みえるものはみえないものにさわって永劫の過去につらなっている。（「トンボグヮー〈偵察機〉」の項の末尾、『琉球語の美しさ』八四ページ）

琉球語、今帰仁方言語彙の意味記述を遙かに超えて、ここに見られる生命観は言語と深く結びついたものであり、また、それは個人的体験を基盤としながらそれを越える契機を見出そうとする思考である。

仲程は、仲宗根のこのようなあり方について、以下のように述べている。

個人の体験に色濃く染められた言葉、命とつながる言葉、命を命たらしめている言葉、そのような言葉について考えていた人によって『手記』は書かれ、編まれていた。（仲程昌徳『「ひめゆり」たちの声』「あとがき」、二一九ページ）

その後、「浄魂を抱いて」では、29段落に語られる「母の死の知らせ前日夕日を見るタブーを犯したこと　蚊帳のホタル」のくだりに至る。この段落への参照補助的な仲宗根の思索として『琉球語の美しさ』の次の一節を置いてみる。

……（蚊帳のホタルのエピソードと、死ぬ前に母の発した「ちルーちマールン」の言葉に触れ）……ことばの中に、誰も感じない深い悲しみを私だけは感じる。

このようにことばはどんなに簡単なことばでも個人個人の体験によって、色濃く染められている。各人の体験がちがっている以上、色づけしている意識の底までも、相手に伝えることには限度のあることで、極めて浅い水面近くのものにとどまる。ことばの持つ宿命なのだ。孤独は人間につきものだ。（「ちルーちマールン〈身体の筋がちぢむ〉」の項、『琉球語の美しさ』一三二ページ、傍線稿者）

この、言語における個人の体験によるニュアンスの異なり、と言うのでは「浅い」ような「色づけ」が人間をして言語を必然たらしめつつ「意識の底」を形成し、人をして「孤独」に向かわしめる、という思念は、ある意味で透徹した静かな諦念にも見える。

しかしこれは、仲宗根の諦めを意味するのではない。むしろ仲宗根自身が「生きる意味」とその「生において追うべき責務」を必然たらしめるものであっただろう。

『ひめゆりと生きて仲宗根政善日記』には、以下のように記されている。

一九八三年八月五日

日本の教師にして、あるいは世界の教師で一九四名の教え子たちを死に追いやったのは、今では私一人だけであろう。彼らが生きていたらわからなかったことを明らかにしなければならない責務が残っている。

（三〇八ページ、傍線稿者）

この恐ろしいほどの「一人」という認識のもとに、仲宗根は戦後を生きたのであった。そしてこの前後から、仲宗根に、そしてひめゆり学徒生存者たちに、ひめゆり平和祈念資料館の構想が、強い「希望」として語られ始め、行動に移されてゆくのである。前年に、『ひめゆり手記』が文庫本化され、いわば今まで以上に「全国区」としての「ひめゆり」が加速してきている。まさにその渦中にあって、仲宗根は「私一人」という認識を深めていったのであろう。そしてそれゆえ、その「色濃く染められた」「意識の底」を何度でも繰り返し書きつつ、慰霊塔のみではない「場」として「世界平和を発信する場」としてのひめゆりの塔に、自身をして何度でも戻らしめたのではなかったか。その仲宗根を、仲程は以下のように描く。

……「戦争を体験してきたものたちが戦争について「後世に伝えることは必要である」といい、「うもらせることはいけい」と考えるのは、それほど特別な考え方であるということはない、言ってみればそれは戦争体験者にあってはごくありふれた考え方であるといっていいが、仲宗根のそれが普通とことなるのは「我々はひめゆりの塔に一切の指針があると思う」（一九八〇年六月十日）といい、「この塔は将来人類の進むべき道を示しているのである」（同前）といったように、全てが「ひめゆりの塔」を基にしたところから発されている点にある。（「解説」、『ひめゆりと生きて』三二六～七ページ）

五　むすび

以上、高校生副読本教材としての「浄魂を抱いて」を内容構成から「軸」を見出し、さらに仲宗根の他の書きものにも繰り返し語られることを確認しつつ、異なる文脈の中で繰り返される仲宗根の「体験と思考・思念」のありようから、繰り返し語られることの意味を見出した。

そしてそれは「ひめゆりの塔」に繰り返し立ち戻ってゆくことであった。このことが意味するのは、仲宗根による、個人の体験をもといとしつつ、そしてそれが過酷な孤独とともにありつつも「反戦・反基地世界平和」の道しるべにまで普遍化されてゆく、いわば膨大な道のりであった。

参考文献

仲宗根政善『沖縄の悲劇姫百合の塔をめぐる人々手記』華頂書房、一九五一年

『実録ああひめゆりの学徒』文研出版、一九六八年

『沖縄の悲劇ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』東邦書店、一九七四年

『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川書店、一九八〇年

『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川文庫、一九八二年→一九九〇年改訂版

『石に刻む』沖縄タイムス社、一九八三年

『蚊帳のホタル』沖縄タイムス社、一九八八年

『琉球語の美しさ』ロマン書房一九九五年

『ひめゆりと生きて仲宗根政善日記』琉球新報社、二〇〇二年
大胡太郎「仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』の（再）教材化への一考察」『琉球アジア文化論集』三号、二〇一七
小林照幸『21世紀のひめゆり』毎日新聞社、二〇〇二年
『ひめゆり沖縄からのメッセージ』角川書店、二〇一〇年
下嶋哲朗『平和は「退屈」ですか元ひめゆり学徒と若者たちの500日』岩波書店、二〇〇六年
冨山一郎『増補戦場の記憶』日本経済評論社、二〇〇六年
仲程昌徳『沖縄の戦記』朝日新聞社、一九八二年
『「ひめゆり」たちの声―『手記』と『日記』を読み解く―』出版社Mugen、二〇一二年

1拙稿「仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』の（再）教材化への一考察」（『琉球アジア文化論集』三号、2017.3.）